

とお ちよう
十 市 町

寺川の右岸に十市城跡

いまも十市町に鎮座する十市御県坐神社（とおちのみあがたにいますじんじゃ）の神祭り費用に、地元からあがる租税の一部を当てたという記録が天平二（七三〇）年の正倉院文書に残っています。十市（とおいち）の地名が古代からあったなによりの証明です。

この地を中世に支配したのが当時の豪族・十市氏です。五代目に当たる遠忠（とおただ）の時に最盛期を迎え、天文年間（一五三二―一五四）に十市城を築き居城としました。武勇に優れた遠忠は同時に書家・歌人としても有名で、彼の文学活動や後世に残した数々の歌集などを大正―昭和と活躍した歌人・川田順らも激賞しています。

町の南側を西へ流れる寺川の右岸堤防上に位置する十市城跡は、市教育委員会の発掘調査で東西五五〇メートル、南北四三〇メートルの規模だったことが分かりました。

永禄八（一五六五）年に十市城の城主「サンチョ・イシバシ殿」を、一人の宣教師がこの城に訪ねたことが、同じ宣教師・ルイス・デ・フロイスの「日本史」に書き残されています。

このあたり一帯が中世の大和でたいへん、注目される土地であったと考えられます。